

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380642

研究課題名(和文) 近代化と葬儀の変容に関する実証的研究 日本とベトナムの比較を中心として

研究課題名(英文) Empirical Study of the transformation and modernization of funeral ceremony; a comparison of Japan and Vietnam

研究代表者

嶋根 克己 (Shimane, Katsumi)

専修大学・人間科学部・教授

研究者番号：20235633

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：専修大学社会関係資本研究センターが実施した東アジア諸国の意識調査では、近隣住民の葬儀への参加率はGDPの高まりに反比例して低くなることが明らかになった。これは近代化によって各社会の葬儀が変容することを如実に示している。日本では戦後に伝統的葬儀、近代的葬儀、現代的葬儀とその姿を変えてきたが、現在では超高齢社会化と少子化により第三の変化が生じていると考えられる。それは身内の葬儀からの家族の撤退である。一方、近代化によって都市への人口集中が続くベトナムでは、伝統的な葬儀が崩れ始め、都市と村落コミュニティが組み合わさりながら葬儀を執行していることが明らかになった。これは近代化への過渡期と考えられる。

研究成果の概要(英文)：In the awareness surveys for East Asian societies conducted by Center for Social Capital Studies of Senshu University, we found that the participation rate to the funeral for the neighborhoods people is falling down in inverse proportion to the increase of GDP. This indicates that the funeral of each society is transformed by modernization. In Japan it is considered to be the third of the change by the super-aged society of the declining birth rate has occurred now. That means some family members are withdrawing from the relative's and the family member's funeral in Japan. In Vietnam, traditional funeral collapse began during the modernization. In several cases I observed, the urban and the village community carried out the funeral for their members. That is quite different from traditional way. Now their funeral customs are changing under the modernization.

研究分野：社会学

キーワード：葬儀 死の社会学 ベトナム 近代化 東アジア 葬祭業 日本

1. 研究開始当初の背景

日本では都市化による葬儀の変容はほぼ完了しつつあり、現在は全国的な儀礼の平準化が進んでいると考えられてきた。しかし少子化・超高齢化は葬儀を取り巻く状況を大きく変えつつある。一方ベトナムでは現在農村から都市に人口が急速に流入しつつあり、都市部に各地の儀礼が持ち込まれながら新たな葬儀形式が形成されている。本研究では次の事柄に焦点を当てて研究を進める。

(1) 日・越、都市・村落という二軸からの比較検討によってアジアにおける葬儀の近代化過程、およびその背後にある社会関係の変容を解読する。

(2) 日本の葬儀の変容を、葬儀業者の動向に注目してその実態を明らかにする

(3) 変容しつつあるベトナムの葬儀を、参与観察や関係者へのインタビューなどをもとに詳細に記述し、現代的葬儀のモデル化を試みる。

2. 研究の目的

本研究の目的は近代化によって葬儀がいかに変容したかを、すでに一定の変容を経験している日本のそれと、現在急速な変容をこうむっているベトナムのそれを比較することで、背後で作用している変動要因を探り当てることにある。上記の目的を遂行するために、それぞれの社会の葬儀を丹念に調査して、葬儀の変動モデル化を試みる。その上で都市への人口流入と文化的混交、さらには社会関係の希薄化が、どのように葬儀の商品化、商業化をもたらされるかを実証的に把握する。

3. 研究の方法

本研究を遂行するために三つの方向をとる。第一は、近代化の中での葬儀の変容過程を大きく把握すること、第二は、日本国内の葬儀研究の更なる深化であり、第三は、変容しつつあるベトナムの葬儀のモデル化である。

これまで筆者は日本の葬儀についてかなりの研究を蓄積してきたが、現在も新しい形の葬儀が生まれつつある。特に葬祭業者の動向から、新たな葬祭業の発展と地域社会の変容についての研究を深める。

ベトナムにおける葬儀については、現地調査による事例の積み重ねと海外の研究者との研究交流により、ベトナムにおける葬儀の農村モデルと都市モデルの形成に努める。

同時に葬儀の変動に関する他の調査データ、特に筆者が参加してきた専修大学社会知性開発センター・社会関係資本研究センターが行ったアジア各国の意識調査の結果などを援用しながら、近代化が葬儀の変動を促すという仮説の裏付けに務める。

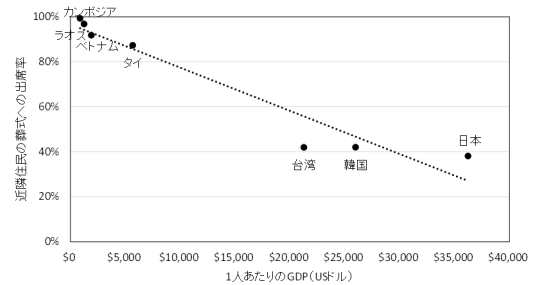
4. 研究成果

(1) 東アジアにおける葬儀意識

下図は、筆者が参加した社会関係資本研究

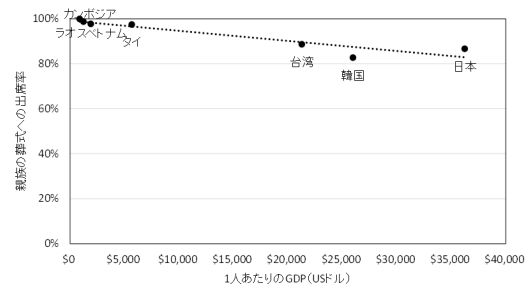
センターが平成22年から26年にかけて行ったアジア各国での調査研究の結果の一部である。

各国のGDPが多くなればなるほど近隣住民の葬儀への参加度が低くなることが理解できる。

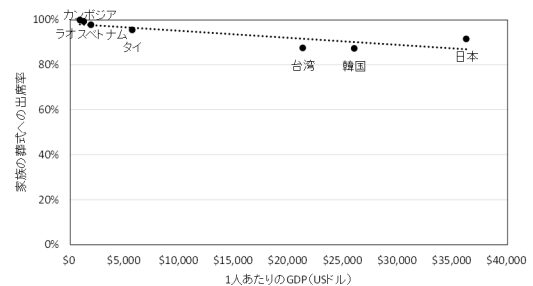


ここには社会の発展によって近代的な人間関係が浸透するにつれて、相互扶助的な葬儀が解体していく過程がはっきりと現れている。

しかし下図を見てみると近隣住民の参加度の低下に比べればその傾きは少ないものの親族の葬儀への参加度もGDPの増加とともに減少していることが見て取れる。



さらに家族の葬儀への出席度を尋ねてみたところ、下記のような図を得た。



このように東南アジア諸国での意識調査をふまえると、一人当たりGDPが増加するとまず近隣住民の葬儀への参加率が大きく減少し、さらに親族、家族への葬儀への参加率さえもが減少することが検証された。それではその理由は何に求められるのか。次に日本における葬儀の変容をモデル化することでその答えを探ってみる。

(2) 日本における葬儀の変容

では近代化と葬儀の変容はどのような関係にあるのか。日本での先行研究をもとに考えてみよう。森謙二は、日本社会の近代化に

よる葬儀の変動を二段階に分けて説明している。地域社会が葬送の手伝いから撤退するとともに、葬送領域の市場化が進展していく「(葬送の)第一の近代化」と、個人化および少子高齢化の進展とともに、残された家族が、先祖の供養や祭祀の役割を果たさなくなる「(葬送の)第二の近代化」である。近代化による葬儀の変化を二段階に分けて考える森のアイデアは大変優れているが、筆者はここにもう一段階の変化を挿入しておくべきだであるとする。それは地域社会の葬儀からの撤退と家族の撤退のあいだに、同僚と親族の撤退があったと考える視点である。

日本における葬儀の変動過程

葬祭業者の役割	主要な担い手	他者からの援助	社会状況	
小	近隣住民	相互扶助	農村社会	儀 伝統的葬
全般化	の近隣住民撤退		都市集中	化 第一の変
大	職場集団	香典	都市化	儀 近代的葬
産業化	の同僚・親族撤退		少子化	化 第二の変
多様化	家族	少参加者減	核家族	儀 現代的葬
の異業種と提携	退家族の撤		超高齢化	化 第三の変
括死後のケア	自己ニンゲラ	自己資金	無縁社会	葬 近未来的儀

農村社会を中心に行われてきた伝統的な葬儀における葬儀の主要な担い手は近隣住民であったのが、都市化の進展によって職場集団にとって代わられていく。これを近代化の過程と呼ぶことに何のためらいもない。

しかし高齢社会化と少子化は家族のサイズをさらに縮小させ、葬儀の担い手から同僚や親族を排除していく。日本ではこの変化が起こったのは 1990 年代以降からのことである。森が問題としている状況、すなわち家族が死者の葬儀をしなくなるのは、さらにその次の段階、つまり超高齢社会化と高齢者の世帯分離を待たねばならないように思われる。こうした状況から生まれるさまざまな事態は、家族による遺体の隠蔽、孤独死・無縁死、直葬などとして現象している。

つまり高度経済成長と都市化によって「伝統的な葬儀」から「近代的な葬儀」へと「第一の変化」をとげ、それが 1990 年代以降「第二の変化」によって「現代的葬儀」へと変貌した。現在起こっている現象は「第三の変化」であり、この結果葬儀は自己責任による「近未来的な葬儀」へと変化する可能性を秘めているとするのが、筆者の基本認識である。

アジアの先進国である日本社会においては、葬儀からの近隣住民の撤退、同僚・親族の撤退という変化を遂げ、現在では家族さえも葬儀から撤退するかもしれない瀬戸際にきている。そうした需要の変化にしたがって葬儀業者の機能や業態も大きく変わってきているのである。

(3) ベトナムにおける葬儀の変動

では現在進行形で近代化の岐路に立っているベトナム社会における葬儀はどのような状況にあるのか。ベトナムにおけるフィールドワークの結果から、現地における葬儀の状況について検討しておこう。

未成道男が詳細に調査したように、ベトナムにおける葬儀の基本形態は農村にある(『ベトナムの祖先祭祀』)。また Nguyen Thi Oanh の論考は (Nguyen : 2012) は、ベトナム社会の葬送儀礼の底流には『寿梅家礼』(Tho Mai Gia Le) など中国文化の影響を受けた「家礼」があることを紹介している。

2011 年に実際に筆者が参列した葬儀では、未成や Nguyen の示した葬儀モデルとは異なった現象が確認された。ハノイ市内で亡くなったある女性は、長年暮らした市内の息子宅での葬儀のあと、町の近隣住民に見送られて出棺した。主要道路までの葬列によって近隣住民に見送られた後、数十キロはなれた故郷に運ばれた。そこでもう一度その近隣住民によって葬列が組まれて、村内の田圃に埋葬された。ここでは日本の葬儀ではほぼ撤退してしまった近隣住民が都市と農村で二重に重なり合い、葬儀の主要な実施主体となっていることが理解できる。これは未成が記述した村落的な葬儀からが都市的な葬儀への移行形態であると考えられる。

また伝統的習慣によれば、埋葬は土葬 拾骨 再埋葬という二重埋葬であったが、都市地域内の十分な墓地域を確保できないことから、火葬後埋葬するケースや 100 キロほど離れた場所に墓地公園が建設されるなどの

現象も出てきている。これらは日本における「第一の変化」に相当する現象であると考えられる。またホワイトカラーなどの都市住民は、広く同僚が香典による弔意を表し、それが家族の葬儀費用をまかなっている現実も確認されている。おそらく今後は葬儀業者の役割が急速に拡大するものと思われる。

(4) その他の地域でのフィールドワーク

今回の一連の調査では日本とベトナム社会の葬儀のフィールドワーク調査を中心におこなったが、機会を得てアフリカ・ウガンダにおける葬儀調査の機会に恵まれた。ウガンダの近代化はいまだ発展の緒にすぎないばかりであり、都市化・産業化も十分ではない。したがって葬儀におけるコミュニティ住民の関与の度合いが非常に大きく、逆に葬儀業者が関与する部分もほとんどないことが確認された。

このような発展途上国、中進国、先進国における葬儀の実態を現地調査し、比較研究を積み重ねることによって、経済発展指標とは異なった社会関係や意識の変容過程を実証的に把握できると期待できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

「書評 森謙二著『墓と葬送の社会史』『墓と葬送のゆくえ』」、嶋根克己、『法社会学』査読有、第82号、282-289、2016

「失われる記憶と編集される記憶 ユダヤ人虐殺にかかわる展示から」、嶋根克己、『日仏社会学年報』査読有、第26号、17-32、2015

“Funeral Ceremony as an Embedded Social Capital”, Katsumi Shimane, 『専修大学社会科学研究所月報』、査読無、No.613、43-56、2014

“Social Capital in Vietnam; On the Basis of Survey Report on Urban and Rural Areas”, Katsumi Shimane, The Senshu Social Capital Review, 査読無, No.4, 143-159, 2014

[学会発表](計2件)

Katsumi Shimane, Social Rituals in South East Asia from the Aspect of Social Network, 2014 ANPOR Conference(Toki Messe), 2014年11月30日

Katsumi Shimane, Funeral Ceremony as an Embedded Social Capital, XVIII ISA World Congress of Sociology, 2014年07月14日, Yokohama

[図書](計3件)

“Xã hội vô cảm và giai đoạn cuối đời trong thời đại ít trẻ em- già hóa dân số ở Nhật Bản”, Katsumi Shimane, *Quan*

hệ Việt Nam- Nhật Bản 40 năm nhìn lại và định hướng tương lai, Nhà xuất bản Khoa học xã hội, 310-320, 2014, Hanoi.

「火葬と散骨」「現代における墓地の存在意義」、嶋根克己、『事典 墓の考古学』(土生田純之編) 吉川弘文堂、366-373、2013

“L’ expérience mortuaire des sociétés urbaines nipponnes”, Katsumi Shimane, *La Place des morts dans les mégapoles d’Asie orientale*, ed. Natacha Aveline-Dubach, Les Indes savantes, 43-64, 2013

6. 研究組織

(1) 研究代表者

嶋根 克己 (SHIMANE KATSUMI)

専修大学・人間科学部・教授

研究者番号：20235633